

書籍紹介

酒井卯作編

『柳田国男南島旅行記』

田中 久夫

ついこの間、書店で見かけて購入した。酒井先生の巻頭にある「南島旅行見聞記」によると、「柳田国男が九州東海岸から琉球を旅したときの記録の全文」であり、これをもととして柳田国男が『海南小記』を書いたという。『海南小記』は沖縄のもつ意味について考えさせてくれた書物であった。本書の目次は以下の通りに展開している。

出発く大阪（一九二〇年十二月十三日～十

二月十五日）

九州（一九二〇年十二月十五日～一

九二二年一月三日）

沖縄本島（一九二二年一月五日～一月五

日）

宮古（一九二二年一月二十二日～一

月二十三日）

宮古（一九二二年一月二十二日～一

月二十三日）

八重山（一九二二年一月二十三日～一

月三十日）

宮古（一九二二年一月三十一日～二

月一日）

沖縄本島（一九二二年二月二日～二月七

日）

奄美く帰京（一九二二年二月七日～三月一

日）

南島旅行旅程表

◎旅する貴族「南島旅行見聞記」解説 酒

井卯作

である。それでも沖縄は遠い世界の話であった。これだと出発から九州までは現在進行中の神武東征に伴う海路の事があって、行程が手に取るようにわかった。

豊後の保戸島の鮑は思いもよらなかった。

昨年、このことの調査で大分県の佐賀ノ関へ行ったとき、関鯖と関鯨の話は出て来たが鮑の話はなかった。しかし先年、御影の夏のセミナーで愛媛県の佐田岬の先端の漁師町に宿

泊したときには、鮑が夕食に山ほど出て食べきれなかったことを思い出した。柳田国男は保土島、四浦は皆佐伯領、旧時代五百束とかの熨鮑を献上する役ありて、鮑は保土島民のみにとる事が許されたり。明治の始、此権利を主張することを怠りし為、今は付近のものを採るのみ。

と報告した。柳田国男は本当に偉い人だ。

それでも「南島旅行見聞記」には、柳田国男には似つかわしくない記事が散見する。遊郭の話である。この佐賀関の少し南の下ノ江で「停車場より十五町、永禄中よりの遊郭なり」とある。この辺りは名にしおう豊後水道に面したところで、神武天皇も水先案内人を求めたところである。ここで潮待ち風待ちなどをした。そのために遊郭が置かれたのである。南下して蒲江・尾浦へ出、そして上人津楠本浦に來ると「私娼盛なり。ふしぎなる風なり。蒲江の猪串も同然、近來少しくやむ。娘をかりらるる風ありき。猪串にては娼妓上り女、此業を営めりといふ」とある。柳田がこれを気にしたのはこの頃、旅をする者は葉売りとか船に乗る人とか特別な人であった。

問題はその次である。食べ物途中で取ることでできても、長い旅行中の洗濯をどのようにするかである。さらに着物に取りついた蚤虱をどのようにするかである。この点、本書を編集した酒井卯作は最後に「旅する貴族」で上手く表現した。

柳田のように「蚤も亦、天然無代価の枕時計である」と達観してみても、やはり蚤は大敵である。：蚤と虱は旅につきもので、旅する当人には当然の伴侶であるが、迷惑するのはその旅に出た者の留守家族である。貴族らしい旅を続ける柳田も、いつまでも同じ着物を着ているわけにはいかない。着替えがいる。：柳田のご令息、為正氏の妻、富美子夫人によれば、柳田が旅から帰宅すると、まず玄関で着物を脱がせて裸にし、着替えをさせてから、部屋に入れたという。

旅の途中で洗濯などがどうしても必要である。これに対して、洗濯をしましょう。ご飯を炊きましようというて舟を寄せて来るのが広島県大崎上島の木の江のオチョロ舟である。この洗濯と蚤虱退治に手こずっていた柳

田はこの私娼に関心をもったのであろう。そして私娼を出す村のことを考えた。先の蒲江のすぐ近くの畑野浦では次の様に観測している。

畑野浦と尾浦との間、大草津 四戸。四戸分にはあまるほどの畑あり。：尾浦は漁業盛なり。耕地少なく芋を近村にかひ、補充す。入津湾は土地まだあまれり。但急峻なれば畑となしがたき故かと書いた。ともかく目を皿のようにして周囲を観察している。

大分県の北海郡郡臼杵町深田では炭焼小五郎子孫の家を訪れた。そして「炭焼小五郎事」を書き上げた。人が振り返りもしなかった伝説から鉱山史を書き上げたのである。豊後で炭焼きが盛んなのは金の生産の為であったからでもあると論じた。私もこれに刺激を受けて論文を数本書いた。『金銀島日本』はその一つである。

次いで柳田は宮崎県の都井岬で野馬を見ているのに、「都井にはビロウなし」とわざわざ書いた。これは『海南小記』に掲載されている「阿遅摩佐の島」に結実された。「檳榔

は前関白近衛殿の御領、鎮西志摩荘の土産なり」とあるのは「白く晒したビロウの葉をもって、美しい車を造り」とある原料であったというのである。御所車をビロウの葉で造るのと同じようなことはラオスで私たちも見つた。これは転動してくる学校の先生の宿舎を造るためのものであった。屋根・壁を作るためであった

ともかく、私は『海南小記』から沖縄に関心を持ったのであったが、興味はそのままに終わっていた。ところが神戸女子大学に助教授で就職し教授となり、そしてそこで初めてもったゼミ生に田場美智子さんという沖縄出身の方がいた。その方が卒業旅行に沖縄へ行きましようといってくれた。もう一人の河野朝子さんの三人で沖縄へ出かけた。国頭北の端から南の久高島に到るまでの旅行であった。よい勉強になった。始めて見る沖縄は大へん刺激的であり新鮮であった。

この時から沖縄が神話の世界から研究の対象になったのであった。沖縄の墓制に驚き民俗学の大先達であった伊波普猷先生の「南島の古代の葬制」に教えられていたときでもあ

ったので、それこそ沖縄風の伊波普猷先生のお墓にお参りもした。柳田国男は「津堅の後生山 埋葬を行はず、自然に骨となるを待つ。臭甚しといふ」と書き、また「久高にも此風あり、棺を崖より下し、酒宴をして腐臭をまぎらす。何年かの後、骨を集めて葬るといへり」と記述した。柳田国男も傍に伊波普猷がいるだけに遺棄墓制のことを考えたのであろう。ともかく葬制墓制の観察の記事が見聞記には多い。

私たちは「最広大の山」である斎場嶽ではヤモリ類の絨緞に、しかも両手をしっかりと立てたヤモリの大群に出迎えられた。一歩進むとその幅だけに道ができるのである。その祭りの庭が「久高の遥拝所なり。大なる岩の相對して屋をなせる下をすぎ、岬の端に出れば此島正面に見ゆ」とある。ただし久高島では墓地を探したが失敗した。

それでも久高島のイザイホウの祭りの場には、祭りのときではないからといってご案内して下さった。ここは男子禁制の場所である。イザイホウのときにNHKのカメラが入ることができなかったところである。その祭りの

場は円形の広場で周りの木がドーム状に頭上を覆っていた。写真を撮ったが帰ってみるとすべてピンボケであった。この経験は後にまた経験することになった。

大上直美さんと沖縄本島の南の端、喜屋武へ行つたときのこと、太平洋戦争末期に大勢の方が身を投じられたところで、大上さんが写真のシャツターが切れないといって嘆いた。そこで別の場所に移つたときに風景を撮つたらといったらといった。大上さんは半信半疑のままでシャツターを下ろした。驚いたことにここでは写真が撮れたのである。もちろん私は初めから喜屋武では写真をとらなかつた。島根県に加賀の旧潜戸での経験もあつたからである。

ついで宮原彩氏・横山奈央子氏らと八重山である。アカマタ・クロマタの祭りの見学である。と同時に村の祭りがあつた。女性の司が神殿を背景に女性が演ずる芸能を見るのである。男はこれには参加できなかった。男性は祭りの場の警備や周囲の幡立てに従事していた。祭りの力仕事の場に登場するのである。話に聞く女性の活躍である。宮古の記事にな

ると断然、芸能の話が多くなる。

ついで先の大上直美さんである。大上さんは結婚して沖縄の南恩納に住み、さらに南恩納の村誌を作るようになった。それに呼んでくれたのである。それから幾度も南恩納を流通科学大学准教授藤原喜美子氏とともに訪れることになった。レンタカーで走りまわつたのである。沖縄が本当に身近になつた。そして作つたのが『南恩納誌』である。

「〇屋取 今、寄留人といふ。近代の島内移民、前後三回ほど此運動ありと伊波君研究を発表」とある。南恩納の村もこの屋取の村落であつて生活が苦しかったという。それでも屋取には真つ赤な位牌が家に祀られていた。八重山では「土族のみは皆系図を存す」とある。この村は首里へ国頭村の北から東海岸沿いに屋嘉に送られてきた物品を峠を西に越えた南恩納で受取り、そこから那覇へ運ぶのが古い時代の南恩納の人々の仕事であつた。南恩納にはよい湊があつた。柳田は残念ながらここへ訪れていない。

「南島旅行記」を読み進めて見て、柳田国

男が調査をおこないながら論文を作り上げて
いつていることがよくわかった。私自身も『海
南小記』に記載されている「炭焼小五郎が事」
に興味を持った。このことによつて柳田の旅
行の姿勢がよくわかる。勉強にもなった。そ
れでもまだ私は長野県の伊那の柳田国男館に
は行っていない。「ここに柳田の蔵書の一部
も収納されたまま移動した。その中心に『海
南小記』の初版本がある。その本に柳田自身
が朱を入れて訂正している」とある。そして、
編者酒井卯作は「柳田を知ろうとすれば、
山の神秘を描いた『遠野物語』と、海の文化
誌を描いたこの『海南小記』の二冊をお読み
になれば、柳田の日本人観のおよその見当は
つくかもしれない」という言葉で結んでいる。
(森話社 二〇〇九年十一月刊 二九〇〇円
＋税)